



S F ・ 遺書屋

一通目 ・ ・ ・ 冤罪

湊 覚（みなと かく）

「ねえ、メールに遺書が添付されているだけだのメールが届いたよ」

「初めてね、何も書かれていないメールが届くなんて。

メール・アドレスは？」

「『グルグル』だって」

「それも、変わっているわね」



「?????」

「ただいま〜っ。あれ、どうしたの？ 鳩が豆鉄砲を食らったような顔をしちゃって」

「それが、この前『グルグル』って人からメールが届いたよね」

「ええ、遺書が添付されているだけで、何も書いていなかった人でしょう」

「その『グルグル』さんから、意味不明なメールが届いたんだよ」

「意味不明？ 意味不明って、貴方じゃないの？」

どれ、どれ、私にも見せて」

「これだよ。

『w s t っし w s ん え こ で s y も y y ご k y こ と g s で き ん s k y ん s っ て き m っ し t s p s s y w
s - ど w s ん え こ 』」

「なにこれ！」

「そうだろう。豆鉄砲を食らっちゃうだろう」

「う〜ん、そうだね。何かの暗号なのかしら？」

「俺もそう思って、すべてをローマ字にしてみたのが、これなんだ。

『w s t s s i w s n n e k o d e s y m o y y g o k y k o t o g s d e k i n n s k y n n s t t
e k i m s s i t s p s s y w s - d o w s n n e k o 』

分かる？」

「う〜ん????」

.....

ピンポ〜ン、ピンポ〜ン

「誰かしら？」

「宅急便かな？」

「最近の宅急便屋さんは、訪問する前に電話をしてくるわ。

それより、早く出てあげて」

「な、なんだか嫌(いや)な予感がするな・・・。

どなたですか？」

「ワシだよ、ワシ。早くドアを開けろ！」

「は、はい・・・」

「よお、生きてたか！」

「は、はい」

「どうしたのですか、仕事じゃないのですか？」

「ああ、休みを取った」

「げ、元気そうに見え…。ひょっとして、ぐ、具合が悪いのですか？」

「お前に心配されたくない！ が、…落ち込んでる」

「ねえ、上がってください」

「ああ、一人でいると、気が変になりそうなんだな」

……………

「おっ、ちゃんと、ウサギさんのテーブルクロスも綺麗になってるな。

猫のも…」

「何があったのですか？」

「飼っていた猫が、昨日、死んだんだ」

「ね、猫を飼っていたんですか？」

「悪いか！ ワシが猫を飼っちゃ！」

「い、いえ。ね、猫の名前は『イヤミ』ですか？」

「ワシにケンカを売ってるのか、お前は！

『グルグル』だよ、『グルグル』」

「ええ、『グルグル』！」

「どうしたんだ、二人でハモるなんて、珍しいじゃないか」

「そ、その『グルグル』からメールが届いたんですよ」

「なに馬鹿なことを言っているんだ。ワシの『グルグル』は猫だぞ、猫！」

「そ、そうですよね。ね、猫がメールなんか出しませんよね」

「当たり前だろうが！ 常識で考えろ、常識で！ それでなくても、猫の『グルグル』が死んだんで、気分転換にお前達のところに来たのに、思い出させやがって！

ところで、その『グルグル』からのメールには、なんて書いてあったんだ！」

「そ、それが、読めなくて…」

「読めない？」

「刑事さん、これなのよ」

と言って、意味不明のメールを見せた。

「なんだこれは？」

まるで、子供がイタズラで送って来たみたいじゃないか」

「そ、そうなんですよ」

「子供からのメール？」

そうか、子供のメールかも知れないわね。

子供だとすると…、何かを打ち間違えているのね。

あらっ、『a』がないわね。ねえ、『s』の代わりにキーボードの隣の『a』にしてみてください」

「そうすると、こうなるね。

『w a t a a i w a n n e k o d e a y m o y y g o k y k o t o g a d e k i n n a k y n n a t t e k i m a a i t a p a a y w a - d o w a n n e k o』

これを日本語にすると、

『わたあいわんえこであyもyyごkyことができんあkyんあってきまあいたばあyわーどわんえこ』

「ねえ、最初の文章より、日本語らしくなったと思わない？」

「す、すごい。でも、まだ意味が分からないよ。

ねえ、『u』の字もないよ。『u』と『y』もキーボードじゃ隣同士だから、これも入れ替えてみよ
うか？」

「そうね。大変だけど、お願い」

「そうすると、

『wataaiwannekodeaumouugokukotogadekinnakunnatt
ekimaaitapaaauwardowaneko』になるから、

『わたあいわんえこであうもううごくことができんあくんあつてきまあいたぱあうわーどわんえこ』

「おい、『n』を一つにしてみてください！」

「は、はい。

『wataaiwannekodeaumouugokukotogadekinakunattteki
maaitapaaauwardowaneko』を日本語にすると、

『わたあいわねこであうもううごくことができなくなってきまあいたぱあうわーどわねこ』

『s』と『a』を交換し過ぎているのよ。それに……。私にパソコンを貸して！

『watasiwanekodeaumouugokukotogadekinakunatttekimasita
pasuwardowaneko』だから、

『わたしわねこです

もううごくことができなくなってきました

ぱすわーどわねこ』

『私は猫です

もう動くことが出来なくなってきました

パスワードは猫』」

「ま、まさか飼っていた『グルグル』からか？」

「分かりませんが、多分、そうだと思います。

刑事さんの『グルグル』ちゃんは、亡くなってしまったのですよね。

刑事さん、『遺書』を開いても良いのですよね？」

「ああ。

ワシは、『遺書屋』じゃないが、ここにいても良いか？」

「も、もちろんです」

「ねえ、『グルグル』ちゃんから届いた『遺書』を開いて、読んでくださる」

「分かった！

パスワードは『n e k o』。

あれっ、『パスワードは正しくありません』とエラーが出ちゃったよ」

「おかしいわね、打ち間違っていない？」

「何度、打ち込んでも同じだよ」

「ち、ちょっと待ってくれ。ひょっとすると、『グルグル』は『n e k o』ではなく『n e c o』と打ったのかも知れない。ワシは『k』を『c』で打っていたのを、あいつは見てたんだ」

「じゃあ『n e c o』って打ってみるよ。でも、読めるのかな？」

「きっと読めるわ！」

「あっ、開いた。ほ、本当だ！ 読める！ 変換ミスがあるけど、読めるよ！」

「さっきのメールは、きっと『グルグル』が死ぬ間際に私達にメールして来たのよ。だから、あんな変なメールになってしまったと思ったの」

「『グルグル』は、寂しがり屋でなあ。家に帰ると、足にまとわりついて来るんだ。抱いてやると、『グルグル』と、のどを鳴らすんだ、『グルグル』と。

時間がある時に、パソコンの前に座って、インターネットやメールをやってる時に、『グルグル』が、ワシのひざの上に飛び乗って来るんだ。そして、ジッとパソコンの画面とキーボードを見つめているんだ、あいつは。ワシは、インターネットもメールも、ボケ防止に始めてみたんだがな。

でも、メールなんて、迷惑メールしか届かなかったよ。ちょっと、寂しくなって『グルグル』のメールアドレスを作ってやったんだ。

そして、『グルグル』の手を取って、ワシ宛のメールを打たせたんだ。

・・・それで、覚えちゃったんだろうな。電源の入れ方も、切り方も。

『遺書屋』のメールアドレスは、宛先に登録しておいた。

時々、冗談で『ワシが、ここで倒れちゃったら、ここにメールしてくれよな』って言ったこともあった。それで、死期を知った『グルグル』が送ってきたんだろう、『遺書』を・・・」

「頭の良い猫だったんですね」

「・・・ワシよりもな」

「よ、読んでも・・・良いですか？」

「頼む」

「『私わ 刑事さんを買われてたいる猫のグルグルです

私わ 小さい解き 刑事さんの娘さんにヒ口割れました

刑事さんも お母さんも 喜んで 私を買ってくれた

でも もう都市を取り杉 いつ死ぬか 分かりません
もし 死んだら 刑事さんが 一人になってしまいます
それが心肺です 仲良くしてください お願いします』
け、刑事さんの心配をしている！」

「ワシの心配などしなくても良いのに…。

…『わ』と『は』が苦手だな。何度もワシは間違えてた。こいつも一緒だ…。

…変換ミスが多いな。漢字も教えてやりゃあ良かった…。

…でも、一生懸命に漢字にしようとしたんだろう…。

…ひらがなだけで、良かったのに…」

刑事さんは、そう言いながら、唇を嚙(か)んでいた。

目から、涙が一滴(ひとしずく)流れて光った。

「まだ、続きがあるわね」

「あ、ああ、読むよ。

『刑事さん 私わ 娘さんを月落としていません

あの時 娘さんわ カラスに教われたのです

でも アッと夕間に 作を越えて 落ちてしまいました

でも お母さんにわ 分かってもらえなかった

それだけわ 刑事さんに 分かって欲しくて

あの解きに カラスが来ると 大声で泣いたんだけど

娘さんも お母さんも 気がついてくれなかった

刑事さん 川いがってくれて ありがとう

刑事さんの帰りを マイニチ舞っていました

だから 死んでも 鳴かないで ね』」

……………

「バカヤロー！」

「ど、どうしたんですか？」

「知らなかった。ワシは何も知らなかった！」

「刑事さん。…もし、よろしければ、話していただけますか」

「すまん。大声を出して…」

「娘さんが亡くなったのは、『グルグル』のせいではないように書いてありましたが…」

「ああ。…遠い昔のことだが、聞いてくれるか」

「無理しなくても、良いですよ」

「い、いや、お前達には、いつか話そうと思っていたんだ。聞いてくれ。

……………あれは、娘が三歳。

娘と三人で近くの公園に行った時だった。

娘が、急に走り出して、公園のはじっこの木の下まで行ったと思ったら、小さな手の中に、小さな子猫を乗せて、戻って来たんだ。

ワシも母さんも、顔を見合わせて微笑(ほほえ)んでしまった。

いつも、おとなしい娘が、

『飼っても良い！ 私が育てるから、飼っても良い！ お願い！』

って言ったんだ。

ワシも母さんも…うなずいた。

『グルグル』と名前をつけたのは、娘だったんだよ。

娘は、手のひらに子猫を乗せて帰って来る時に、子猫はのどを『グルグル』と鳴らしていたそうだ。

家に帰ってきて、娘がそっと子猫を畳(たたみ)の上に置いたら、自分のシッポをみつけて、グルグルと廻りだしたんだ。娘はそれを見て、やっぱり『グルグル』だ、と叫んだんだ。

ワシも母さんも、何も言えずに微笑んで見ているだけだった。

それから二年が過ぎた。

娘は、来年は小学生になるって言うクリスマスの日だった。前日は、キリスト教徒でもないワシは、事件がなかったんで、ケーキと鶏の足を買って帰ったんだ。

ケーキを切ろうとした時に、電話が掛かって来た。クリスマスイブで酒を飲み過ぎた男達のケンカで、一般人を巻き込んでしまった事件だった。

母さんは『行ってらっしゃい。気をつけてね』と、笑ってワシを送ってくれた。

娘も、手を振って『行ってらっしゃい』と言ってくれた。

それが、娘の最後の言葉になっちゃった。

単なる、酔っ払い同士のケンカだったと思われたんだが、巻き込まれたのは民間人じゃなく、ヤクザの幹部だったんだよ。それで、帰れなくなっちゃった。

翌日だった。

その頃、五階建てのアパートの三階に住んでいたんだよ。

猫を飼っても、うるさい時代じゃなかった。

そのアパートには、やっと洗濯物が干せるくらいの狭いベランダがあっただけ。娘には注意していたんだが、娘も五歳になり、注意をしなくなっていた。

あの日、『グルグル』と娘は、ベランダに出ていたんだ。

十二月と言うのに良い天気で、風もなくポカポカした日でな。母さんは、ベランダを気にしながら、部屋の掃除をしていたんだ。

そしたら、『キャー』って言う娘の声が聞こえた。

母さんは、ベランダに飛んで行ったが、そこには『グルグル』が柵の上に乗って『ニャーニャー』と大きな声で、下を向いているだけで、娘の姿はなかった。

母さんはベランダから下を見て、娘が倒れているのを見つけて、娘と同じように悲鳴をあげたそうだった。アパートの人達や近所の人が気がついて救急車を呼んでくれた。娘は病院に運ばれたが、病院に着く前にすでに死んでいた。ワシは、その頃、徹夜で見張りをして、車の中で寝ていたよ。

母さんは娘が死んだ日には、大声で泣いていた。次の日は、声も出さずに泣いていた。三日目には、ランドセルを抱いているだけで泣いてはいなかった。

年が開け、数ヶ月が過ぎたある日、母さんが『もう、私は平気よ。お父さん、仕事、頑張ってるね』と言ってくれたんだよ。

ワシは、母さんが元気になった、と勝手に思った。母さんの気持ちなど、考えていなかった。

…娘が死んだあの時に、警察なんて辞めていれば…。

娘の入学式の日だったんだよ。

…ワシは、忘れていた。

帰ってきたら、テーブルの上に『さようなら』とメモがあった。

すぐに警察に、『妻が失踪したので探して欲しい』と電話をした。

一睡(いっすい)も出来なかった。

翌日に警察から電話があったよ。

『断崖から飛び降りたようです。遺書とランドセルの入った紙袋が見つかりました』と。でも、遺体は見つからなかった。

ワシは、母さんは、死んでいない、と今でも思っている。母さんは、記憶をなくして、どこかで生きていると、今でも思っている。

ところで、『グルグル』の『遺書』に、『でも お母さんにわ 分かってもらえなかった』と書いてあったよな。

実は、娘が死んだ後で、ワシが帰って来ると、時々『グルグル』がケガをしていることがあったんだ。

娘が亡くなってからの『グルグル』は、一步も家を出ようとしなかった。ベランダへも。

きっと、母さんは、あの子が死んだのは『グルグル』のせいだと思い込んでしまっていたんだろう。

ワシが……」

「もう良いでしょう、刑事さん」

「そ、そうだったな。しゃべり過ぎてしまったようだ。

悪いが、少しだけ一人にしてくれるかな？」

「ええ。

刑事さん、『グルグル』のために、供養をしたいのですが、良いですか？」

「あ、ありがとう」

「ねえ、買い物に行くわよ。一緒に行って」

「あ、ああ。一緒に行くよ。

刑事さん、猫の椅子に座っていただけますか？」

「あ、ああ。ありがとうな。

悪いが、当分の間、この席も、ワシに貸してくれるかな？」

「良いですよ。なあ」

「もちろん！ それでは、買い物に行つて来ますので、留守番を頼みますね」

「任せろ！ ワシは、刑事だ！」